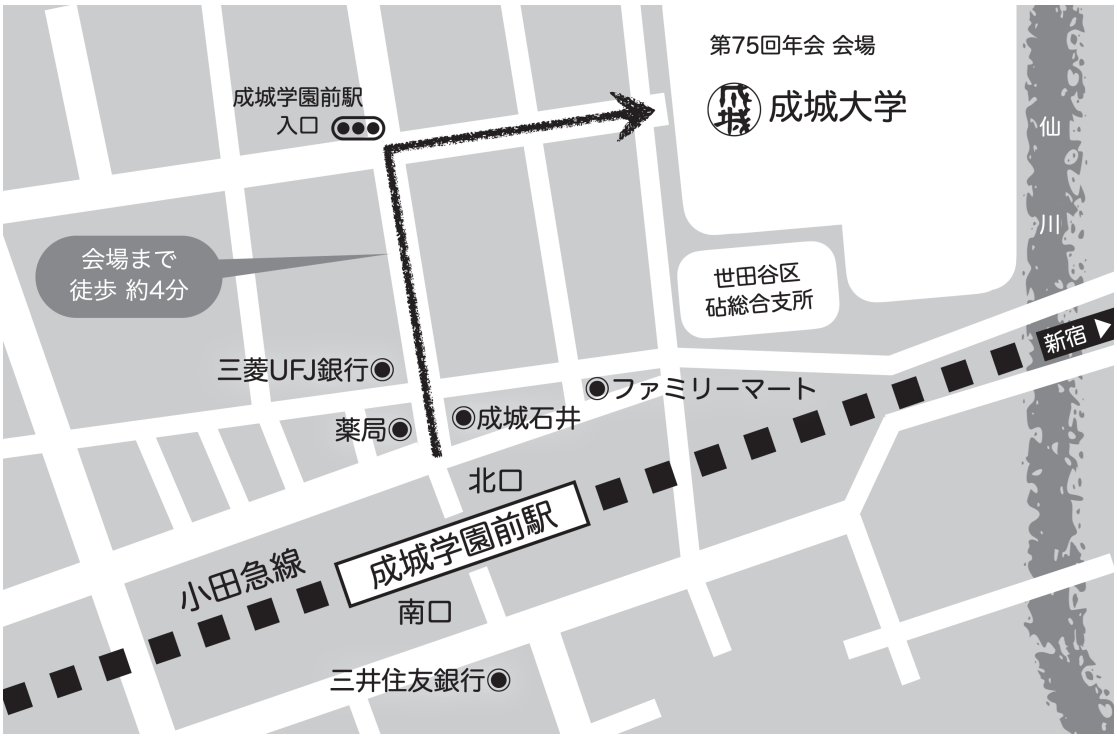
日本民俗学会　第 75 回年会　東京
第 3 回サーキュラー

1. 大会概要

主催　一般社団法人　日本民俗学会
協力　成城大学
期日　2023 年 10 月 21 日（土）・22 日（日）
会場　成城大学（東京都世田谷区成城 6 丁目 1 番 20 号）

会場アクセス

小田急線成城学園前駅から徒歩で 4 分。
（急行は停車しますが、快速急行は停車しません）



※会場の所在、アクセスに関しては成城大学ウェブサイトもご参照ください。
https://www.seijo.ac.jp/access/

2. 大会プログラム

10 月 21 日（土）　公開シンポジウム・授賞式・総会・懇親会

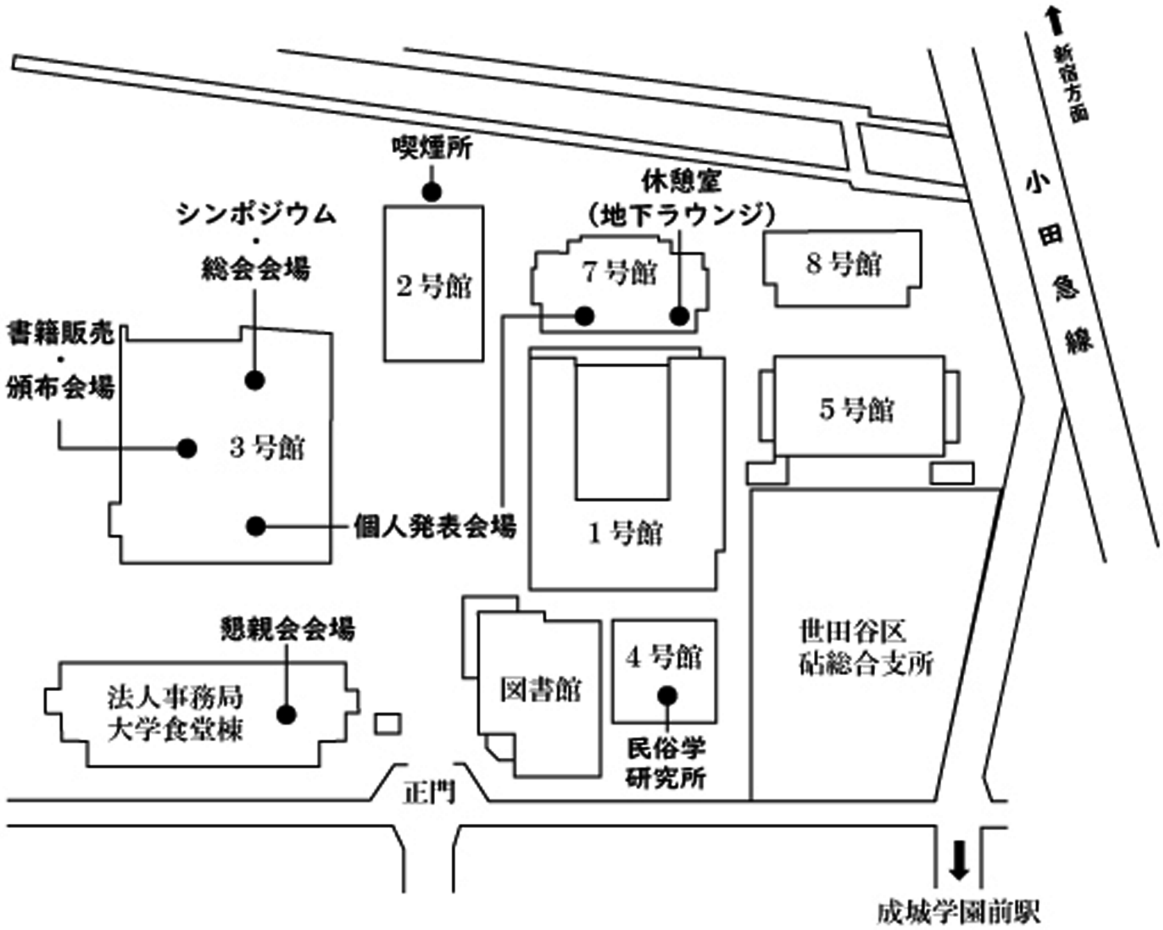
12：00 ～　　受付開始（3 号館 1 階エントランス）
13：00 ～ 16：00　公開シンポジウム（3 号館地下 1 階 003 教室）
「民俗学でつながる、民俗学をつなげる
－フィールドワークのこれからを考える－」

16：10 ～ 17：50　研究奨励賞授賞式、会員総会
18：00 ～ 20：00　懇親会（本部棟 1 階学生食堂）

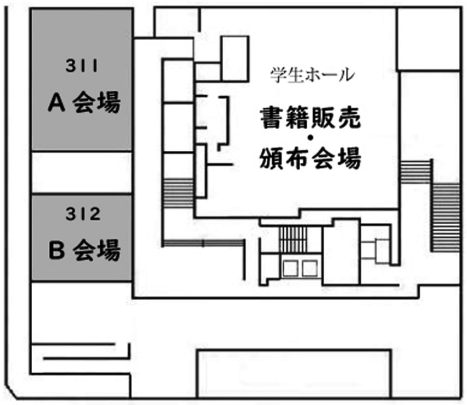
10 月 22 日（日）　研究発表
9：00 ～　受付開始
9：30 ～ 11：30　研究発表
11：30 ～ 13：00　休憩
13：00 ～ 16：00　研究発表

※今後の状況の変化により、プログラム内容が変更となる場合があります。
※今年度の年会は、プレシンポジウムおよび見学会を企画しておりません。

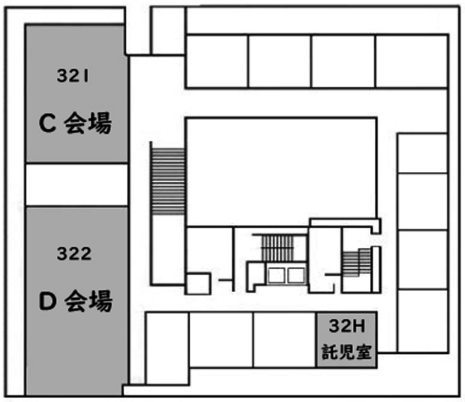
3. 会場案内図



３号館１階

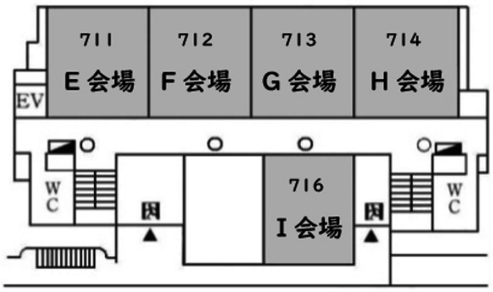


３号館２階

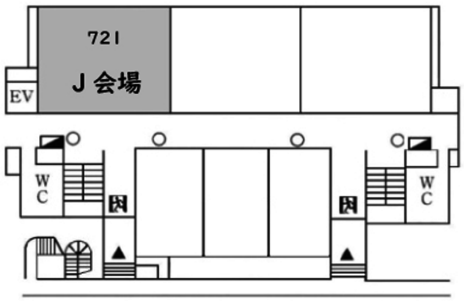


３号館地下

７号館１階



７号館２階



4. 年会参加者の皆さまへ

①受付

- 受付場所は 21 日（土）・22 日（日）とも 3 号館 1 階エントランスです。参加費を納入済みの方は、お名前をお伝えいただき、名札と配布物をお受け取りください。
- 参加申し込みをされたものの参加費が未納の方、当日参加申し込みをされる方は「当日参加受付」にてお申し込みください。参加費が未納の方には名前入りの名札を用意しておりませんのでご了承ください。なお、要旨集・弁当については登録時点で申し込みをしていても、事前支払いがなかったものについてはキャンセル扱いとしています。悪しからずご了承ください。
- 当日の年会参加費は一般 4,000 円、学生 2,000 円です。学生料金は年会当日、学生証を提示した方に適用されます。

②名札

- 会場では常時、名札をお付けください。名札には懇親会費の支払いについての記載があります。懇親会には、必ず名札を付けてご参加くださいますようお願い申し上げます。

③懇親会

- 懇親会は 21 日（土）18 時より、本部棟 1 階の学生食堂にて行います。
- 懇親会場に入場する際には名札を会場入口のスタッフにご提示ください。
- 当日、参加を申し込まれる方は、懇親会場入口にある「懇親会当日受付」にてお申し込みください。当日の懇親会参加費は、一般 6,000 円、学生 3,000 円です（非会員の方もこれに準じます）。
- 懇親会の間、荷物置き場を近くに用意しますが、盗難・紛失・毀損などについて、実行委員会としては一切責任を負いかねます。貴重品は各自で保管をお願いいたします。

④休憩・昼食

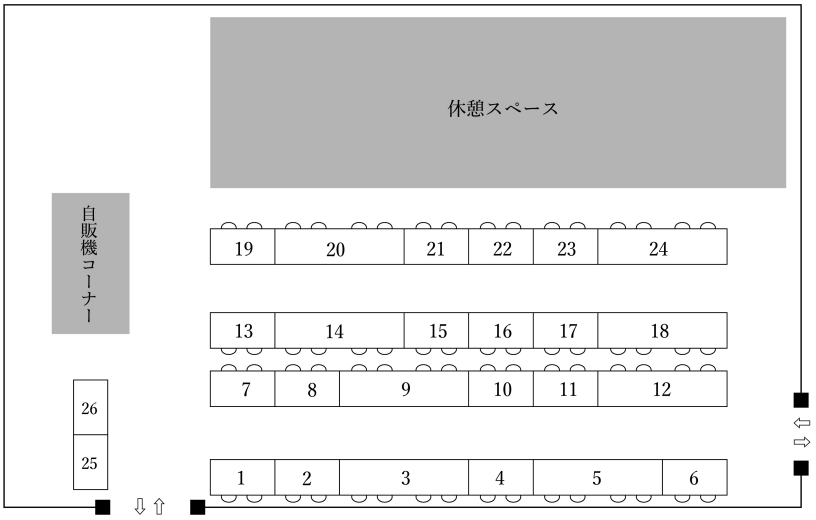
- 会場最寄り駅周辺には飲食店・コンビニがいくつかありますが、大学内の食堂は土日とも閉店しておりますので、弁当の持参をおすすめします。
- キャンパス内には飲み物の自動販売機がございます。また、21 日（土）、22 日（日）ともに休憩室を 3 号館 1 階ホールおよび 7 号館地下ラウンジに設けますのでご利用ください。
- 22 日（日）の弁当代を納入されている方は弁当代の支払いについての記載がある名札をお持ちになり、22 日（日）11 時以降、3 号館 1 階エントランスの受付付近にて弁当をお受け取りください。名札がないと弁当をお渡しできませんので、紛失されないようご注意ください

⑤書籍販売・頒布ブース

• 以下のとおり、３号館１階学生ホールに書籍販売・頒布ブースを設けます。

21 日（土） 12:30~17:00（シンポジウム閉会＝ 16:00）

22 日（日） 9:30~17:00（一般発表最終＝ 16:00）



1	慶應義塾大学出版会＊土曜のみ	14	風響社
1	日常と文化研究会＊日曜のみ	15	まつり同好会
2	七月社	16	稲垣圭祐
3	岩田書院	17	新潟大学民俗学研究室
4	株式会社 実生社	18	成城大学大学院常民文化研究会
5	株式会社 明石書店	19	株式会社古今書院
6	社会伝承研究会・社会民俗研究会	20	一般社団法人 農山漁村文化協会
7	株式会社 昭和堂	21	世間話研究会
8	株式会社 勉誠社	22	福島県民俗学会
9	株式会社 吉川弘文館	23	現在学研究会
10	クレス出版	24	柳田國男記念伊那民俗学研究所
11	アーツアンドクラフツ	25	書籍販売・頒布事務局
12	慶友社	26	チラシコーナー
13	株式会社かなえ		

• 年会期間中は常時開場しています(懇親会中は閉鎖)。22 日(日)は 17:00 に完全撤収となります。各ブースは机を離して配置します。休憩スペースは飲食可能です。ただし各ブースにお立ち寄りの際は、書籍保護の観点から飲食物をお持ちにならないようお願いいたします。

• 年会参加の皆様はチラシコーナー［26］に自由にチラシ等を置いていただけますので、ぜひご活用ください。なお年会終了時に残ったチラシは事務局で処分いたします。

⑥喫煙について

- ２号館裏手の喫煙所をご利用ください。

⑦託児室

- 当日は託児室を開設しておりますが、事前申し込みをされた方のみご利用できます。当日の緊急連絡先は申込者に直接お伝えします。

⑧バリアフリー設備

- シンポジウムおよび個別研究発表の会場となる３号館･7 号館にはエレベーターがあります。エレベーターをご利用になる必要のある参加者のために、その他の参加者の方は階段での移動をお願いいたします。３号館・７号館および懇親会の会場入口にはスロープが設置されております。
- 3 号館２階に多目的トイレがあります。

⑨その他

- 発表会場内では携帯電話・スマートフォン等での通話はご遠慮ください。
- 会場内で何かご不明な点がございましたら、スタッフまでおたずねください。

5. 個人発表の皆さまへ

①使用機材

- 発表会場の各教室には、一律に以下の設備を用意します。
  （1）HDMI ケーブル
  （2）会場 PC（OS は Windows、PowerPoint インストール済）
  （3）備え付けプロジェクター
- PC を持ち込む方は、お手持ちの機器に（1）の接続端子があるかご確認ください。もしくは（1）に接続するアダプターを各自でご用意ください。なお接続不調に備え、会場 PC の利用に切り替え可能であるよう、USB メモリー等でデータを別に持参されることをおすすめいたします。
- 会場の機材は動画や音声の出力に十分適しておりません。
- 実行委員会では事前のデータの預かりには対応いたしません。
- 会場では eduroam を用いた wifi 接続が使用可能ですが、通信の安定性につきましては実行委員会では保証いたしません。オンライン環境を前提としたプレゼンテーションは各自の責任でお願いいたします。eduroam への接続方法等の詳細は、各自の所属機関でお尋ねください。

②配布資料

- 配布資料がある場合は、あらかじめ 50 部以上をご用意ください。

- 実行委員会では配布資料の事前預かりおよび印刷には対応いたしません。またステープラー等の貸出も行っておりません。
- 配布資料は、各会場入り口付近に長机を用意しますので、開始後はそちらに配置いたします。発表終了後もそのままにしていただいてかまいませんが、会期後は処分いたします。

③発表受付（22 日）

- 発表者は発表の 30 分前までに発表会場にて受付をお済ませください。その際、ご用意いただいた資料を会場スタッフにお渡しください。ただし、午前最初の発表者は 9 時 15 分までに、午後最初の発表者は 12 時 45 分までに会場受付をお済ませください。
- 発表者は、直前の発表が始まるまでに発表会場の「次発表者席」に着席のうえ待機してください。ただし、午前最初の発表者は 9 時 20 分より、午後最初の発表者は 12 時 50 分より待機してください。
- 午前中の発表者には 9 時から 9 時 20 分まで、午後の発表者には 12 時 30 分から 12 時 50 分まで、機器の動作確認のための時間を設けます。

④発表時間

- 発表 20 分・質疑応答 5 分とし、以下のようにベルで時間をお知らせします。終了時間は厳守していただきますようお願いいたします。

  17 分経過ベル 1 回（発表終了 3 分前）
  20 分経過ベル 2 回（発表終了）
  25 分経過ベル 3 回（質疑応答終了）
- 発表者や座長の交代、聴講者の移動のため、各発表の間に 5 分の時間をとります。この時間は発表延長のための時間ではありませんのでご注意ください。
- 発表者の責任により発表の開始が遅れた場合には定刻の範囲内で発表・質疑応答を行ってください。

6. グループ発表の皆さまへ

①発表受付

- グループ発表の代表者はメンバーが揃ったことをご確認のうえ、発表予定時刻の 15 分前までに発表会場の受付をお済ませください。

②発表時間

- グループ発表の時間枠は 120 分です。グループ発表には、タイムキーパーは手配いたしません。進行、質問の受付、時間配分などの運営は決められた時間内で、各グループで自由に決めてください。終了時間の厳守をお願いいたします。

③使用機材・配布資料

- 使用機材と配布資料については、個人発表に準じますので、前項をご覧ください。

7. 座長の皆さまへ

- ご担当の発表が始まる 30 分前までに各会場スタッフにお申し出のうえ、10 分前までに発表会場の「次座長席」にご着席ください。ただし、午前最初の座長の方は 9 時 20 分より、午後最初の座長の方は 12 時 50 分より待機してください。
- 「5. 個人発表の皆さまへ ④発表時間」に記した時間どおりにタイムキーパーがベルを鳴らします。このベルを参考にして、発表が時間どおりに行われるようご配慮をお願いいたします。
- 進行中に問題が生じた場合は、各会場スタッフへお申し付けください。

8. 感染症対策

- 新型コロナウイルス感染症対策として、会場の換気を重視するほか、手指消毒用のアルコールを設置いたします。また、各自、必要に応じてマスクの着用等の対策を行ってください。なお、開催当日までの感染状況に応じて、開催方法等が変更となる場合があります。

9. 欠席等の連絡について

- 10 月 22 日（日）に研究発表を予定している方で、欠席せざるをえなくなった場合には、すみやかに年会実行委員会（minzokugaku75@gmail.com）までご連絡ください。会場に掲示を出すとともに、座長にその旨を連絡いたします。
- 同様に、座長を担当予定の方で、遅刻・欠席をせざるをえなくなった場合には、すみやかに上記実行委員会のアドレスにご連絡ください。
- 発熱・咳等の体調不良の場合には、参加のキャンセルをご検討ください。
- 欠席の連絡は随時受付いたしますが、遅くとも当日（10 月 22 日）午前 8 時までにはメール連絡をお願いいたします。これを超過した場合、無届の欠席として扱わざるをえなくなります。

10. 公開シンポジウム

「民俗学でつながる、民俗学をつなげる－フィールドワークのこれからを考える－」

日時　10 月 21 日（土）　13:00 ～ 16:00
会場　3 号館地下 1 階 003 教室

趣旨説明
　加藤秀雄（滋賀県／滋賀県立琵琶湖博物館学芸員）

パネリスト報告
　1：川島秀一（福島県／日本民俗学会前会長）
　　「五感から学ぶ漁船操業―フィールドワークの可能性」
　2：市川秀之（滋賀県／滋賀県立大学教授）
　　「フィールドワーク教育を通じた地域社会とのつながり」
　3：越智郁乃（宮城県／東北大学准教授）
　　「二つのミンゾクガク（民俗学 / 民族学）的フィールドワークの交錯」

休憩

コメント
　1：内山大介（栃木県／淑徳大学教授）
　2：松岡薫（奈良県／天理大学講師）

司会：塚原伸治（東京都／東京大学准教授）

民俗学でつながる、民俗学をつなげる
－フィールドワークのこれからを考える－

趣旨

日本民俗学会の前身である民間伝承の会の機関誌『民間伝承』第４号（1935）の巻頭言で宮本常一は、「この学問の面白さは読者が同時に実践者たり得る所である」と述べている。この巻頭言のタイトルは「採集者の養成」なので、ここでいわれている「実践」とは、民俗採集であることがわかるだろう。そして、その成果を発信する『民間伝承』誌は、全国の民俗学者のネットワークを形成するプラットフォームに成長していった。

それから 90 年近い時を経た現在、民間伝承の会は日本民俗学会に名称を変え、民俗採集よりもフィールドワークという言葉の方が、私たちにとって馴染み深いものとなっている。この「民俗採集からフィールドワークへ」という変化は、自然物の標本採集のように「民俗」の採集を目指す調査から、より広い関心に基づく調査が行われるようになったことを示しているといえるだろう。しかし、それは過去に共有されていた斯学の対象と目的を拡散させるものでもあり、フィールドワークも「人それぞれ」のものにしてしまう側面があった点は否めない。さらに現在の民俗学は、調査研究の場もフィールドワークの主体も多様性を増しており、本会の会員は大学、地方学会、博物館、行政機関など多様な組織で、様々な目的のもと、フィールドワークの経験を積んできたと思われる。

このような現状認識のもと、本シンポジウムではいま一度、民俗学のフィールドワークは何のために行うものなのか、そしてそれが何を生み出すのかということを考えてみたい。フィールドワークの主目的が、そこに行かなければ得られない情報を得ることであることは論を俟たないが、近年の様々な研究成果を鑑みるに、フィールドワークにはそれだけに留まらない可能性があるように感じられる。例えば、フィールドで出会った人々と民俗学者が協働して地域活性化に関わる活動を行ったり、最初は観察対象でしかなかった祭礼や芸能に自ら参加して、そこで得た経験を記述するといった例は、単なる情報収集の枠に留まらないものとして位置づけられる。すなわちフィールドワークは私たちと社会をつなげるものであり、それがより深いレベルの研究に接続される可能性を持つものとして捉えることが可能なのである。

このようなフィールドワークの可能性を考えるにあたって、本シンポジウムでは、長年にわたり精力的なフィールドワークを続けている３名の会員をパネリストに指名し、その実践に学びながら、これからのフィールドワークのあり方について考えたい。登壇者は、それぞれ活動する地域も専門も異なっているが、フィールドワークをとおして人と社会につながり、その成果を学界内外に発信し続けている点は共通している。今回は、これからの民俗学を担う若い世代の会員にも、民俗学のフィールドワークに対する理解を深めてもらう、すなわち「民俗学をつなげる」ことも意識しつつ、今後の民俗学がどのように人、あるいは社会とつながっていけばよいかということを議論したい。

（文責：加藤秀雄）

五感から学ぶ漁船操業―フィールドワークの可能性

川島秀一（福島県／日本民俗学会前会長）

私は 2018 年の 4 月から、福島県の新地町の漁船に乗って、沿岸漁業の固定式刺網漁の手伝いをしている。これまでの「調査のために漁船に乗せていただく」ということと大きな違いは、漁業者の方から乗船を依頼されたこと、その作業に対して日給をいただいていることである。乗船する条件として私がお願いしたのは、作業中の写真撮影であった。

この、仕事をしながらの写真撮影という目的と行為があるからこそ、漁船操業の全体を見渡そうとする視点を持ち続けることができたが、漁船のオヤカタもまた作業全体の効率を上げるために、常に全体を把握しようとする視点を持ち続けている。この二つの視点が、ときに重なり、ときにすれ違い、ときに対立することがある。「見ている自分」だけでなく、「見られている自分」、さらにそのことを「意識している自分」が、船上の作業の工程を同時に意識しながら、手作業を休めることなく、常に想念される点である。

「写真」は視覚中心であるが、オヤカタは操業中に、その日の漁の特徴を独り言のように簡潔に語る場合があり、その声を聴くことによって、その日の撮影のテーマが決まったりする。そのほか、刺網から魚をはずすときの素手や軍手、ゴム手袋の使い分けなど、魚の違いによって生じる触覚の違いなども、実際の作業において大きな条件となる。

船上での私の仕事は、市場に出す「売り魚」よりも、シタモノと呼ばれる、市場に出せない見ばえの悪い魚や未利用魚、海に戻す生物などを、網からはずす作業が専らであるが、この統計資料に載らないシタモノから見えてくる世界は、「民俗学」でしか扱い得ない対象である。シタモノを「食い魚」に利用する当地の食文化、またはシタモノの「分け魚」に見られるユイの現状、あるいは「配り魚」に見られる贈答による付き合いなど、刺網漁におけるシタモノは、その日の漁労の就業時間を根底から左右するだけでなく、社会関係の下支えにもなっている。

また、東日本大震災後の移転集落の一角に住み、そこでの冠婚葬祭や贈答習慣などに順じて、社会につながりながら、その中で、いかに自分の生活を意識化していくかという点では、船上の仕事と同様である。

さらに、現代の福島の漁業が現実に向き合っている課題の一つである、原発事故後のトリチウム水などの処理水の海洋放棄や、実際の放射能汚染の検出により、クロソイなどが今でも市場に出すことのできないという現況に対しても、関わらざるを得ないことも確かである。

しかし、一つの地に留まり、そこを拠点としながらも、たとえば当地の漁法を全国的な範囲のなかで位置づけたいという思いがあり、日常生活から離れて他の土地を訪ねる機会も多い。ときにはオヤカタをあえて誘って、一緒に他所の漁業を見てまわる機会も作っている。漁業者がそこで見ようとしている視点から、学ぶことが多いからである。

本発表における、一つのフィールドワークの方法は、必ずしも客観化されるものではないが、私が関わり続けてきた「民俗学」という研究の出口を、どのように見出したらよいか、残された限られた時間のなかで、もがいている事例を紹介するだけに留めておきたい。

フィールドワーク教育を通じた地域社会とのつながり

市川秀之（滋賀県／滋賀県立大学）

大学で民俗学を学ぶ時代となって久しい。以前は民間の研究会や学会、あるいは大学においても研究会やサークルで、「習うより慣れよ」式にフィールドワークの技法を取得することが多かったが、現在では大学での実習や演習などで学ぶことが主流となっている。しかしながら、民俗学におけるフィールドワーク教育の方法や技法がこれまで本格的に議論されたことはなく、「習うより慣れよ」式習得法はその場が変わっただけで、内実に大きな変化があるわけではない。また、フィールドワーク教育が、民俗学や人類学といった領域での研究者育成に資することは間違いがないが、大半の受講生は卒業後、研究者となるわけではない。ならば大半の学生にとって、フィールドワーク教育はまったく意味のないものかというとそうでもないようである。卒業生に聞くと、大学でもっとも印象に残った授業経験として、さまざまなフィールドワーク教育を挙げる者が多い。また市川自身の経験を振り返ってみても、フィールドワークが自らの人格形成に大きな影響を与えていることを感じている。

以上を踏まえると、フィールドワーク教育は、研究者育成のための技法習得だけではなく、より広い全人格的な教育の場としての位置づけが必要であり、そのための有効な方法や理論が議論されるべきであろう。またどちらの立場にせよ、フィールドワーク教育には地域社会との関わりが不可欠である。そこでは学生が学ぶだけではなく、学生や教員がさまざまな意味で地域に影響を与えることとなり、双方向的な関係が形成されていく。その関係が調査終了後も継続する場合も多い。教員・学生・地域社会という 3 者の関係性（つながり）を視野にいれたフィールドワーク教育論が要請される所以である。フィールドワーク教育論の熟成は今後の民俗学にとっても重要な課題であろう。

市川は、学生時代以来民俗研究を続けるなかで、まさしく「習うより慣れよ」式にさまざまなフィールドワークを経験し、18 年前に大学教育に携わるようになってからは試行錯誤しながらも、学生とともにフィールドワークを続けてきた。市川の所属する大学では初年次教育としてフィールドワークをする必修授業があるが、そのほかにも各学年でのゼミもフィールドワークを中心とした構成を取っている。また、さまざまな行政調査に学生を帯同したり、地域貢献型サークルの顧問としても学生を指導してきた。当然そのなかで市川にも学生にもさまざまなフィールドとの関わりが生じ、なかには 10 年以上活動を続けているフィールドも複数ある。当初は暗中模索のうちに自らのフィールドワーク技法を学生に伝授するだけであったが、ある時点からは教育としてのフィールドワークの意義を考えるようになり、それを確認するための試みもある程度意識的におこなってきた。

シンポジウムでは、これまでの大学における民俗学的フィールドワーク教育の歩みを踏まえながら、市川のささやかな実践例を紹介することとしたい。フィールドワークの過程で生じた課題にも触れつつ、大学におけるフィールドワーク教育のよりよい姿を考えることができれば幸いである。またフィールドワーク教育の場となるフィールドの住民にとって、学生たちの活動が負荷となるだけではその継続は困難である。よりよい関係を保ちながら、地域社会にいくばくかの貢献をなしうるようなフィールドワーク教育の可能性についても考えてみたい。

二つのミンゾクガク（民俗学 / 民族学）的フィールドワークの交錯

越智郁乃（宮城県／東北大学）

2001 年から沖縄を調査地としてきた報告者にとって、「民俗学」と「民族学」という二つのミンゾクガク的なフィールドワークとは何かというのが隠れたテーマであった。なぜ「隠れて」いたのかというと、民族学・文化人類学を専攻した大学院時代、周囲の研究者の調査対象は当たり前のように国外であったからだ。教員もメインのフィールドは国外であり、単独で 1 年以上の長期にわたるフィールドワーク経験があったり国外放浪経験があったりする先輩院生や同輩の中で、「日本」を選んだのは私一人であった。教員や院生の多くは、現地に「自分の家」があり、擬制的親子関係を結んだ「父・母」「兄弟姉妹」が存在し、国外調査のみ対象とされる民族学の調査助成金を獲得して長期調査に臨むことが当たり前な環境において、「日本」の沖縄における短期調査を繰り返す私は、自身をやや異質な存在として認識していた。

当時の自己認識とは対照的に、民族学には膨大な沖縄研究の成果が蓄積されていた。1945 年までに発展した沖縄学を受けて、研究成果の総決算と問題の所在を明らかにしようとした『民族学研究』15 号第 2 巻の沖縄研究特集（1950）が編まれ、1962 年の第一回民族学会研究大会のシンポジウムにおけるテーマも沖縄であった。1973 年発刊の日本民族学会編『沖縄の民族学的研究－民族社会と世界像』には、地域別の村落構造と祭祀世界、祖先祭祀、門中と同族の比較に関する厚い論考が収められている。とりわけ門中は、親族を主要なテーマとし、欧米の親族・出自に関する人類学的理論の影響を受けた研究者らの注目を集め、多くの研究者が沖縄を調査した。しかしながら、90 年代以降になると研究者の多くが親族研究の本場である国外へと流出するようになり、00 年代には学生の国外調査も当たり前になっていたのである。

しかし教える側に立ってみると、民族学・文化人類学を教える学部の調査実習におけるフィールドワークは今日に至るまでほとんど国内、しかも大学の存在する地域内で行われていることが分かる。例えば東北大学文化人類学研究室でも、開講以降 30 年間で東北地方をフィールドとしたエスノグラフィックな調査が継続され、その成果が蓄積されている。学生にとって調査の金銭的な問題や安全面への配慮があるにせよ、近隣での短期調査の繰り返しによって得られた成果は、現代東北の民俗誌 / 民族誌として読むことができる。またここ数年、自治体からの依頼で実施する東北農村の調査では、人類学者による共同の悉皆調査や資料の共有・検討を行うことで、現代民俗学のエスノグラフィとして民俗学 / 民族学の接合を試みている。以上を踏まえて本シンポジウムでは、過去と現在の調査を例に、現在求められる地域連携・還元も考慮に入れつつ、改めて民俗学 / 民族学的フィールドワークとは何か、ということを考えたい。

11. 個別発表プログラム　（ ）内は座長

会場名 （講義室）	A （311 教室）	B （312 教室）	C （321 教室）	D （322 教室）	E （711 教室）
9:30-9:55	A － 1 真保元 （川松あかり）	B － 1 後藤唯 （宮田妙子）	C － 1 森田玲 （阿部友紀）	D － 1 古谷野洋子 （阿利よし乃）	E － 1 谷口陽子 （塚原伸治）
10:00-10:25	A － 2 金城ハウプトマン朱美 （川松あかり）	B － 2 井上卓哉 （宮田妙子）	C － 2 尾崎陽二 （阿部友紀）	D － 2 大里勇貴 （阿利よし乃）	E － 2 中生勝美 （塚原伸治）
10:30-10:55	A － 3 出口雅敏 （佐藤優）	B － 3 原英子 （菊地暁）	C － 3 福澤光稀 （谷口貢）	D － 3 田村和彦 （門田岳久）	E － 3 後藤麻衣子 （福西大輔）
11:00-11:25	A － 4 潘咏雪 （佐藤優）	B － 4 山川志典 （菊地暁）	C － 4 三隅貴史 （谷口貢）	D － 4 近藤功行 （門田岳久）	E － 4 伊藤新之輔 （福西大輔）
休憩					
13:00-13:25	A － 5 才津祐美子 （山川志典）	B － 5 有馬絵美子 （武士田忠）	C － 5 矢島妙子 （三隅貴史）	D － 5 渡瀬綾乃 （菱川晶子）	E － 5 倉田大智 （鈴木正崇）
13:30-13:55	A － 6 鬼頭慈都 （山川志典）	B － 6 廣江咲奈 （武士田忠）	C － 6 中嶋奈津子 （三隅貴史）	D － 6 後藤康人 （菱川晶子）	E － 6 八田将史 （鈴木正崇）
14:00-14:25	A － 7 DONG QINGYIN （山川志典）	B － 7 鈴木英恵 （武士田忠）	C － 7 グループ発表 永島大輝 廣田龍平 中野真備 吉村風	D － 7 佐藤義典 （菱川晶子）	E － 7 村田典生 （鈴木正崇）
14:30-14:55	A － 8 工藤豪 （森本一彦）	B － 8 石川俊介 （松岡薫）		D － 8 福西大輔 （今野大輔）	E － 8 田中きよむ （金城ハウプトマン朱美）
15:00-15:25	A － 9 霍禹衡 （森本一彦）	B － 9 山田嚴子 （松岡薫）		D － 9 星洋和 （今野大輔）	E － 9 竹中宏子 （金城ハウプトマン朱美）
15:30-15:55	A － 10 関口知誠 （森本一彦）	B － 10 榎本直樹 （松岡薫）		D － 10 及川高 （今野大輔）	E － 10 鬻理恵子 （金城ハウプトマン朱美）

会場名 （講義室）	F （712 教室）	G （713 教室）	H （714 教室）	I （716 教室）	J （721 教室）
9:30-9:55	F － 1 馬場真理子 （才津祐美子）	G － 1 菊地暁 （武井基晃）	H － 1 大田黒司 （田中久美子）	I － 1 伏見裕子 （板橋春夫）	J － 1 グループ発表 松岡薫 髙久舞 舘野太朗 神野知恵
10:00-10:25	F － 2 渡部鮎美 （才津祐美子）	G － 2 佐藤喜久一郎 （武井基晃）	H － 2 佐賀拓実 （田中久美子）	I － 2 伊賀みどり （板橋春夫）	
10:30-10:55	F － 3 川野和昭 （榎美香）	G － 3 上杉富之 （岩野邦康）	H － 3 金田久璋 （市川秀之）	I － 3 郭立東 （須永敬）	
11:00-11:25	F － 4 川松あかり （榎美香）	G － 4 岡山卓矢 （岩野邦康）	H － 4 酒井貴広 （市川秀之）	I － 4 陳宣聿 （須永敬）	
休憩					
13:00-13:25	F － 5 田中久美子 （伊賀みどり）	G － 5 岸本昌良 （田村和彦）	H － 5 周丹 （阿南透）	I － 5 磯本宏紀 （松田睦彦）	J － 2 松山由布子 （丸尾依子）
13:30-13:55	F － 6 三好周平 （伊賀みどり）	G － 6 于子源 （田村和彦）	H － 6 山本芳美 （阿南透）	I － 6 堀田奈穂 （松田睦彦）	J － 3 久留ひろみ （丸尾依子）
14:00-14:25	F － 7 道前美佐緒 （伊賀みどり）	G － 7 川嶋麗華 （田村和彦）	H － 7 余瑋 （阿南透）	I － 7 葉山茂 （松田睦彦）	J － 4 藤原かがみ （丸尾依子）
14:30-14:55	F － 8 濱千代早由美 （石本敏也）	G － 8 市田雅崇 （秋山笑子）	H － 8 佐治靖 （大楽和正）	I － 8 余語琢磨 （辻本侑生）	J － 5 樋田竜男 （島村恭則）
15:00-15:25	F － 9 藤崎綾香 （石本敏也）	G － 9 山村恭子 （秋山笑子）	H － 9 原田信敬 （大楽和正）	I － 9 木村裕樹 （辻本侑生）	J － 6 加賀谷真梨 （島村恭則）
15:30-15:55	F － 10 福寛美 （石本敏也）	G － 10 陳旻 （秋山笑子）	H － 10 中山正典 （大楽和正）	I － 10 笠井賢紀 （辻本侑生）	J － 7 青木涼悟 （島村恭則）

■ A 会場

A － 1　9:30~9:55　**真保元**　（成城大学大学院　文学研究科博士課程後期）
『駅前』の象徴性をめぐる―考察―溝の口駅前再開発による景観の変化を事例に―

A － 2　10:00~10:25　**金城ハウプトマン朱美**　（富山県立大学）
クリスマスマーケット in TOYAMA―さまざまな試みについて―

A － 3　10:30~10:55　**出口雅敏**　（東京都／東京学芸大学）
アッサンブラージュとしての民俗行事―山形県上山市「加勢鳥」の場合―

A － 4　11:00~11:25　**潘咏雪**　（筑波大学人文社会科学研究群）
現代社会における「民話」の資源化―函南町長光寺における僧侶の実践と「民話」の宗教的創造―

昼食休憩

A － 5　13:00~13:25　**才津祐美子**　（長崎大学）
世界遺産と地域社会―「潜伏キリシタン関連遺産」構成資産保有地域を事例として―

A － 6　13:30~13:55　**鬼頭慈都**　（名古屋民俗研究会）
地域文化遺産としての村堂―蓮如忌をめぐって―

A － 7　14:00~14:25　**DONG QINGYIN**　（國學院大學大学院文学研究科）
中国福建省の青蛙節について―無形文化財化に注目して―

A － 8　14:30~14:55　**工藤豪**　（非常勤講師）
滋賀県長浜市余呉町における隠居制家族

A － 9　15:00~15:25　**霍禹衡**（東北大学大学院）
同族内秩序と「中心」としての本家―秋田県旧雄和町伊藤一族を例に―

A － 10　15:30~15:55　**関口知誠**　（明治大学島嶼文化研究所客員研究員）
関船巡行の復活はどのように変わり、何を変えたか―徳島県A町八幡神社例祭の関船巡行を事例に―

■ B 会場

B － 1　9:30~9:55　**後藤唯**　（別府大学大学院）
現代における九尾狐のイメージの変遷―マンガ作品を中心に―

B － 2　10:00~10:25　**井上卓哉**　（静岡県富士山世界遺産センター）
浮世絵に見る富士登山―歌川貞秀『南口村山並大宮ヨリ登山細見全図』を題材に―

B － 3　10:30~10:55　**原英子**　（岩手県立大学）
民俗学で戦争を考える―絵馬に描かれた近代の戦争の記憶と伝承―

B － 4　11:00~11:25　**山川志典**　（早稲田大学）
寺院における写真を納める習俗の変遷―金沢市の寺院を事例として―

昼食休憩

B － 5　13:00~13:25　**有馬絵美子**　（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
地域の暮らしと歳時記

B － 6　13:30~13:55　**廣江咲奈**　（国際児童文学館特別研究者）
やんちや少女の抵抗―1920 年代の『少女の友』における没書を事例に―

B － 7　14:00~14:25　**鈴木英恵**　（群馬パース大学非常勤講師）
民衆画のなかの初絵―群馬県吾妻郡中之条町六合大字入山を中心に―

B － 8　14:30~14:55　**石川俊介**　（追手門学院大学社会学部）
あてにするものとして「信じる」―御柱祭における「山の神」―

B － 9　15:00~15:25　**山田嚴子**　（弘前大学）
同時代の「俗信」―行為・若者・地域差―

B － 10　15:30~15:55　**榎本直樹**　（埼玉大学教養学部非常勤講師）
「おす」と表現される東日本の穀物脱穀―ムギオシ、モミオシ、ノゲオシ―

■ C 会場

C － 1　9:30~9:55　森田玲　（関西学院大学大学院社会学研究科）
神輿はなぜ増えるのか？―大阪・天神祭の事例から―

C － 2　10:00~10:25　尾崎陽二　（明治学院大学 職員）
「見る／見られる」と「見せる／見せられる」―祭り、祭礼、そしてイベント―

C － 3　10:30~10:55　福澤光稀　（東北学院大学）
近代期の山形市における祭礼の成立―義光祭を事例として―

C － 4　11:00~11:25　三隅貴史　（関西学院大学）
小・中規模の神輿渡御の維持と相互動員ネットワーク―東京圏の睦会型神輿会を事例として―

昼食休憩

C － 5　13:00~13:25　矢島妙子　（明治大学 法と社会科学研究所）
ヴァナキュラーの概念から考える「よさこい」における「ソーラン節」

C － 6　13:30~13:55　中嶋奈津子　（佛教大学総合研究所）
早池峰大償神楽の担い手について

C － 7　14:00~15:55　《グループ発表》　過去と現在をつなぐ俗信研究
代表　**永島大輝**（栃木県）

永島大輝　（栃木県）
俗信研究は心意を扱えるのか

廣田龍平　（無所属）
俗信の実践と科学の実践―心意への閉じ込めから行為の連鎖へ―

中野真備　（人間文化研究機構・東洋大学）
俗信としての流星伝承に関する一考察

吉村風　（東京都）
俗信のテキストマイニングからみる「俗信の意味」―歯の俗信を題材として―

コメンテーター　**常光徹**

■ D 会場

D － 1　9:30~9:55　**古谷野洋子**　（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）
沖縄県宮古地方の〈墓を忌避する感性〉―狩俣集落の事例から―

D － 2　10:00~10:25　**大里勇貴**　（沖縄国際大学大学院）
沖縄の葬儀輿「龕」を対象とする祭祀の研究―沖縄本島における龕祭祀を中心に―

D － 3　10:30~10:55　**田村和彦**　（福岡県）
教材（教科書）の検討からみた中国の大学教育における民俗学の一側面について
―東アジアの民俗学的状況の考察に向けての初歩的作業として（2）―

D － 4　11:00~11:25　**近藤功行**　（沖縄キリスト教学院大学人文学部・同大学院異文化コミュニケーション学研究科）
地元紙を通してみる民俗学系記事と学生教育に還元できる視点―卒論指導の側面から―

昼食休憩

D － 5　13:00~13:25　**渡瀬綾乃**　（千葉県）
安産祈願と犬猫供養の今―茨城県常陸大宮市を主な事例として―

D － 6　13:30~13:55　**後藤康人**　（日本カメ自然誌研究会）
かつて鯉と亀を食べなかった祭りのいま――例報告：くりはし夏祭り 2023（埼玉県久喜市）―

D － 7　14:00~14:25　**佐藤義典**（國學院大學大学院文学研究科　博士前期課程）
秋田県における年取り魚習俗

D － 8　14:30~14:55　**福西大輔**　（大分県）
大分県下の清正公信仰に関する一考察

D － 9　15:00~15:25　**星洋和**　（福島県）
学校創立者の顕彰についての一考察―東北学院「校祖」・押川方義の墓地整備を事例に―

D － 10　15:30~15:55　**及川高**　（熊本県）
沖縄地上戦をめぐる慰霊碑の形成過程―『県内慰霊塔（碑）管理状況等実態調査』の可視化から―

■ E 会場

E － 1　9:30~9:55　**谷口陽子**　（明治学院大学・武蔵野美術大学　非常勤講師）
岡山県北の山村の 70 年―1950 年代初頭のミシガン大学日本研究所による岡山調査とその後―

E － 2　10:00~10:25　**中生勝美**　（桜美林大学）
ミシガン大学の岡山調査―アーカイブの利用と再調査―

E － 3　10:30~10:55　**後藤麻衣子**　（千葉県）
福島県旧田島町（現南会津町）における小正月行事の特色―鳥追い、サイノカミを中心に―

E － 4　11:00~11:25　**伊藤新之輔**　（静岡県）
卯月八日研究の課題と展望―「天道花」と死者供養の習俗―

昼食休憩

E － 5　13:00~13:25　**倉田大智**　（國學院大學大学院）
利根川流域のつく舞について

E － 6　13:30~13:55　**八田将史**　（滋賀県）
近江八幡市馬淵地域における複数村落祭祀の変遷―水利慣行を中心として―

E － 7　14:00~14:25　**村田典生**　（佛教大学）
カトリック教徒と仏教徒の相克と協力について―長崎県五島地方を事例として―

E － 8　14:30~14:55　**田中きよむ**　（高知県立大学）
都市部におけるホームレス支援の取り組み―日本と韓国の場合―

E － 9　15:00~15:25　**竹中宏子**　（東京／早稲田大学）
民俗芸能とインクルーシブな社会―女性のみでつくられるカタルーニャの「人間の塔 Castells」―

E － 10　15:30~15:55　**靏理恵子**　（専修大学）
「地域」を耕す実践―子ども食堂、学習支援の事例から―

■ F 会場

F － 1　9:30~9:55　**馬場真理子**　（東京大学大学院）
暦の知識の広がりと実践―奥会津の職人巻物を中心に―

F － 2　10:00~10:25　**渡部鮎美**　（国立環境研究所）
漁業者の生活像の形成とその背景―長崎県五島市玉之浦地区を事例に―

F － 3　10:30~10:55　**川野和昭**　（鹿児島県）
陸稲（ノイネ）栽培と焼畑―南九州とラオス北部の比較から―

F － 4　11:00~11:25　**川松あかり**　（九州産業大学）
炭鉱労働者の空間認識
―旧筑豊炭田地域における元坑内労働者へのライフストーリー・インタビューから―

昼食休憩

F － 5　13:00~13:25　**田中久美子**　（福岡工業大学）
昭和 40 年代以降における自治体による結婚支援事業と結婚相談員

F － 6　13:30~13:55　**三好周平**　（広島県）
「御紋菓」に関する一考察―三原市歴史民俗資料館資料より―

F － 7　14:00~14:25　**道前美佐緒**　（流通科学大学）
戦後日本の婚姻儀礼―分析視点をめぐる試論―

F － 8　14:30~14:55　**濱千代早由美**　（非常勤講師　帝塚山大学等）
御師廃絶後の旧内宮御師家による桑栽培事業

F － 9　15:00~15:25　**藤崎綾香**　（筑波大学大学院）
村の資産として活用された海―沖縄県南城市奥武島に残された「海頭日記帳」の分析から―

F － 10　15:30~15:55　**福寛美**　（法政大学沖縄文化研究所）
内モンゴルのシャマンのリモート・鑑定について

■ G 会場

G － 1　9:30~9:55　菊地暁　（京都大学）
三枝子抄―ある道産子民俗学者の軌跡と作品―

G － 2　10:00~10:25　佐藤喜久一郎　（育英短期大学）
好ましき語り手―地域社会と郷土史家―

G － 3　10:30~10:55　上杉富之　（成城大学）
グローカル民俗学として読み解く「地域学」―その誕生と展開をめぐって―

G － 4　11:00~11:25　岡山卓矢　（宮城県柴田町教育委員会しばたの郷土館）
近代地方都市における郷土研究の展開―藩祖顕彰と郷土偉人の彫刻をめぐって―

昼食休憩

G － 5　13:00~13:25　岸本昌良　（日本国民）
国民健康保険の民俗―定礼とは何か―

G － 6　13:30~13:55　于子源　（筑波大学大学院）
「標準化」が生食文化に与える影響―中国順徳における魚生の「団体標準」の実施を事例として―

G － 7　14:00~14:25　川嶋麗華　（國學院大學）
「伝統的」な葬儀への職能者の関わりについての考察
―愛知県西部における火葬の担い手とその変遷―

G － 8　14:30~14:55　市田雅崇　（立教大学文学部）
近代における伊勢講に関する一考察―北関東・利根川流域の伊勢講の事例から―

G － 9　15:00~15:25　山村恭子　（館山市立博物館）
大正期以降の安房地域における葬送儀礼の変容と地域社会

G － 10　15:30~15:55　陳旻　（筑波大学人文社会科学研究科）
三つの遺体告別儀式―中国における新式葬儀の現場からみた儀式の再編―

■ H 会場

H － 1　9:30~9:55　大田黒司　（(公財) 農村文化研究所　研究員）
天草樋島における不動神社の祭祀と天草の民俗信仰における神仏の混在性

H － 2　10:00~10:25　佐賀拓実　（國學院大學大学院）
浜降祭の研究―東日本と霞ヶ浦沿岸の事例について―

H － 3　10:30~10:55　金田久璋　（日本地名研究所）
ところで、野老はなぜ神饌たりうるのか

H － 4　11:00~11:25　酒井貴広　（早稲田大学）
コロナ禍における儀礼の中断と再開、変化に関する一考察
―2020 年から 2022 年の強卵式を事例として―

昼食休憩

H － 5　13:00~13:25　周丹　（関西学院大学大学院社会学研究科）
サロンからディシプリンへ
―イングランド民俗学ディシプリンの創始者 ジョン・ウィダウソンへのインタビューを中心に―

H － 6　13:30~13:55　山本芳美　（都留文科大学教授）
民俗学者植松明石の写真記録―台湾国立陽明交通大学客家文化学院所蔵の植松文庫収蔵写真より―

H － 7　14:00~14:25　余瑋　（神奈川大学大学院博士後期課程）
民俗文物をめぐる葛藤―中国民俗学史における「物」へのまなざし―

H － 8　14:30~14:55　佐治靖　（福島県）
「普天間」とは、どこか。―沖縄における村落研究の一つの試み―

H － 9　15:00~15:25　原田信敬　（熊本大学社会文化科学教育部博士前期課程／熊本県教育総務局文化課）
「ない」ことをどのように記述できるか―熊本県宇土半島旧三角町における生業の分析から―

H － 10　15:30~15:55　中山正典　（静岡県立農林環境専門職大学）
循環型社会と民俗誌作成―静岡県磐田市敷地地区の秣山をめぐって―

■ I 会場

I － 1　9:30~9:55　伏見裕子　（大阪公立大学工業高等専門学校）
戦後初期の日本における「妊娠・分娩に関する迷信」―文部省迷信調査協議会の視点から―

I － 2　10:00~10:25　伊賀みどり　（帝京平成大学 非常勤講師）
産婆さんの民俗からみる現代出産における病院の集約化―失われた人間的なケア―

I － 3　10:30~10:55　郭立東　（東京大学大学院人文社会系研究科）
大正期における親子地蔵尊の成立と親子心中

I － 4　11:00~11:25　陳宣聿　（大谷大学真宗総合研究所東京分室）
台湾仏教と胎児生命をめぐる初歩的論考―1980 年代末の慈悲精舎事件を手かがりに―

昼食休憩

I － 5　13:00~13:25　磯本宏紀　（徳島県立博物館）
釣り漁師の相互移動ネットワークの検討―紀伊水道の一本釣り漁師の移動―

I － 6　13:30~13:55　堀田奈穂　（関西学院大学大学院）
沖縄の女たちと美容室（1）―ヤマトからの受容と展開―

I － 7　14:00~14:25　葉山茂　（弘前大学人文社会科学部）
男性漁業者のライフヒストリーにみる出稼ぎ―青森県野辺地町の遠洋漁業経験者たちの事例から―

I － 8　14:30~14:55　余語琢磨　（早稲田大学　人間科学学術院）
都市工芸・京焼における製造者：問屋関係―“フセガマ”的取引慣行にみるそのアンビバレント―

I － 9　15:00~15:25　木村裕樹　（立命館大学）
「ロクロ機械」のこと―統制組合の結成と轆轤祖神の流布―

I － 10　15:30~15:55　笠井賢紀　（慶應義塾大学）
『神宮御師資料』に基づく御師配札圏域の GIS ツールによる可視化―伊勢講組織化の分析に向けて―

■ J 会場

J－1　9:30~11:25 《グループ発表》 交じりあう芸能世界

代表　**松岡薫**（天理大学）

松岡薫　（天理大学）

俄にみるプロ／アマの接触・交流・併存

髙久舞　（帝京大学）

＋・－あるいは習合する芸能―地芝居と舞台邦楽を事例として―

舘野太朗

媒介者としての市川少女歌舞伎劇団

神野知恵　（国立民族学博物館）

韓国における女性農楽団の再評価―地域、ジェンダー、ジャンルを越えた芸能―

コメンテーター　**大石泰夫**　（千葉県）

昼食休憩

J－2　13:00~13:25　松山由布子　（中京大学）

近世奥三河の民俗信仰と呪術―在地における宗教知識の相伝を焦点として―

J－3　13:30~13:55　久留ひろみ　（NPO 奄美食育食文化プロジエクト理事長　博士（学術））

奄美のイジュンゴ（泉）―人の一生と水―

J－4　14:00~14:25　藤原かがみ　（國學院大學大学院　文学研究科文学専攻伝承文学コース博士課程前期）

山梨県内の大山講と石尊信仰―『開導記』と石造物を中心に―

J－5　14:30~14:55　樋田竜男　（たかやまそふと）

有翼日輪とハロ―仏教の天蓋を例として―

J－6　15:00~15:25　加賀谷真梨　（新潟県／新潟大学）

沖縄・池間島におけるケガレの感覚

J－7　15:30~15:55　青木涼悟

神社附属講社から見る近代の稲荷信仰―「オダイ」と「稲荷講社」の関係―

日本民俗学会第 75 回年会実行委員会

実行委員長　小島孝夫
事 務 局 長　俵木悟
事　務　局　及川祥平　川田牧人　辻本侑生

実行委員
秋山笑子　荒一能　荒井浩幸　飯倉義之　伊藤純　岡田伊代　小澤正人　加藤秀雄
門田岳久　川松あかり　今野大輔　佐山淳史　瀬川渉　大楽和正　髙木大祐　髙久舞
玉井里奈　塚原伸治　鄧君龍　林洋平　福田麻友子　福西大輔　町田歩未　松田睦彦
丸尾依子　八木橋伸浩　山川志典　（順不同）

日本民俗学会第 75 回年会実行委員会事務局

〒 157-8511
東京都世田谷区成城 6 － 1 － 20
成城大学文芸学部　小島孝夫研究室　気付

連絡は E-mail でお願いします。
E-mail: minzokugaku75@gmail.com
年会ウェブサイト : https://www.nenkai75.fsjnet.jp/

※ 要旨集は年会ウェブサイトにおいても公開します。